

# 小児科病棟におけるコラージュ療法の試みに関する研究：入院している児の母親へのコラージュ作成の効果

著者	金井 幸子
雑誌名	学長特別研究費研究報告書
巻	14
ページ	83-84
発行年	2003-06
その他のタイトル	Clinical Research Concerning the Trial of the Collage Treatment on a Pediatrics Ward : The Effect of the Collage Creation to the Mother of a Child in the Hospital
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10631/505">http://hdl.handle.net/10631/505</a>

新潟県立看護大学学長特別研究費 平成 14 年度 研究報告

小児科病棟におけるコラージュ療法の試みに関する研究  
— 入院している児の母親へのコラージュ作成の効果 —

研究者 金井幸子  
新潟県立看護大学 (小児看護学)

Clinical Research Concerning the Trial of the Collage Treatment on a Pediatrics Ward  
: The Effect of the Collage Creation to the Mother of a Child in the Hospital

Yukiko Kanai  
Niigata College of Nursing

キーワード：コラージュ (Collage), 母親 (Mother), 気分 (Mood), 病棟 (Ward)

## 目的

患児たちが、心理的な意味を表現しやすい道具として、コラージュ\*<sup>1</sup> 作成の機会を提供し、その有効性について検討することを目的に、入院している母子にコラージュ作成を依頼し、実施してきた。母子で実施したのは、患児たちの緊張を和らげるためと、母親達に対するコラージュ作成の影響を検討するためである。現段階の収集したデータは、気管支喘息の児に焦点を当ててデータ収集を行ったため、まだ5事例である。5事例のデータでは、患児にとってコラージュが心理的意味を表現しやすい道具として有効であるかは検討できないと考え、本報告では、患児と共にコラージュを作成した母親の気分に対するコラージュ作成の影響を事例報告する。子ども達の生活管理は広い範囲で母親の肩にかかっており、更に入院中の児の母親は、なおさらストレスフルな状態にある。外来小児科において患児との遊びを通した母親のコラージュ作成は、母親達の怒りや敵意・疲労感を低減するという効果があった<sup>1)</sup> が、入院中の患児をもつ母親の気分にも同様な変化があるのか否かを検討する必要がある。母子で行うコラージュ作成が、入院中の患児をもつ母親の気分をどのように変化させるかについて事例を通して検討する。

\* 1. コラージュとは、雑誌や新聞などの切抜きを台紙の上に貼りつけるというもので、心理療法の一つであり心身の健康を回復する効果があると言われている。雑誌などから直接切り抜いて貼るマガジン法(作成時間 45 分程度)と、あらかじめ切抜きを用意し箱に入れて準備しておくボックス法(作成時間 15~20 分程度)がある<sup>2)</sup>。

## 研究方法

### 1. 対象

入退院を繰り返している児(4歳から10歳)で、状態が安定しベッド上の遊びが可能な児に24時間付き添っている母親(5名)に協力を依頼した。平均年齢40.6±4.2歳、年齢幅36歳から44歳であった。

### 2. 内容

気分プロフィール検査(Profile of Mood States, 以下 POMS とする)と意見感想などを含む7問の質問紙を使用する。POMS とは、質問紙(65項目)であり、「緊張・不安(TA)」、「抑うつ・落込み(D)」、「怒り・敵意(A-H)」、「活気(V)」、「疲労(F)」、「混乱(C)」の気分を6尺度で測定する<sup>3)</sup>。

### 3. 方法

- 1) コラージュ作成前に母親が POMS を記入する。
- 2) ボックス法を用いて四つ切画用紙に、母子並行でコラージュを作成する。
- 3) コラージュ作成後に母親が POMS と質問紙に記入する。

### 4. 期間 2002年11月から2月までの4ヶ月間であった。

### 5. 調査施設 新潟県立中央病院東7病棟

### 6. 分析方法 事例ごとに、POMS 得点を算出しコラージュ作成前後の差を各尺度で比較した。

## 7. 倫理的配慮

口頭でコラージュの有効性について検討していることを伝え、匿名性を約束し研究協力の承諾を得られた者を研究協力者とした。

## 結果

5名(A・B・C・D・E)のコラージュ作成前後のPOMS得点差(=前-後)を図に示した。活力の尺度は負の得点差ほどコラージュ作成が効果的であったことを示し、緊張・不安の尺度、抑うつ感の尺度、怒り・敵意の尺度、疲労感の尺度、思考障害の尺度は、正の得点差ほどコラージュ作成が効果的であったことを示している。

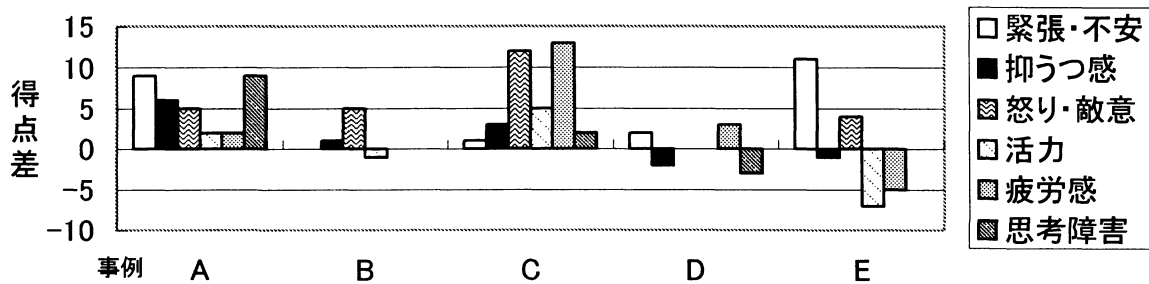


図 1. コラージュ作成前後のPOMS得点差(=前-後)

得点差 5 以上 (5 事例の全項目の得点差平均値 : 4.3) を気分変化のあったものとして捉え、以下のよう  
に分析した。

A : 緊張・不安, 抑うつ感, 怒り・敵意, 思考障害の低減

B : 怒り・敵意の低減

C : 怒り・敵意, 疲労感の低減と活力の減少

D : 変化なし

E : 緊張・不安の低減と活力・疲労感の増加

アンケートで母親の気分変化の有無を尋ねた設問では, A・D が「気分が安らいだ」「やさしい気持ちになれた」と答え, 他の 3 名は特に変化は無かったと答えた。

## 考察

外来小児科の結果のように, 入院中の児の母親達もコラージュ作成によってイライラした気持ちが, 安らぐことが伺えた。しかし, 疲労感については, 効果的ではなかった。入院している子どもの家族のストレス因子として, 「子どもの病気に関連したストレス」の次に「生活環境の変化から生じるストレス」が挙げられている<sup>4)</sup>。24 時間付き添っている母親は, 外来通院の母親とは異なり, 入院生活という生活環境の変化がある。病院内生活で身体的・精神的疲労が増加しているため, 一度のコラージュ作成では, 効果が十分でなかったと思われる。

## 結論

事例数が少ないため一般化はできないが, コラージュ作成は, 入院中の児を持つ母親たちの怒りや敵意を低減させる傾向がある。子ども達だけでなく, 母親達にも有効な心理的援助の一つとしてコラージュ作成を引き続き検討する必要がある。

## 文献

- 1) 福島由梨子, 金井幸子. 外来小児科での母子相互法を用いたコラージュ作成の試み. 第 49 回日本小児保健学会 講演集 2002 : 502-3.
- 2) 山中康裕, 入江 茂, 杉浦京子, 森谷寛之編. コラージュ療法入門. 大阪 : 創元社, 1993 : 5-14.
- 3) 横山和仁, 荒記俊一. 日本版 POMS 手引. 東京 : 金子書房, 2002 : 5-7.
- 4) 高谷裕紀子, 藤原千恵子, 仁尾かおり, 志村愛子, 高田一美. 入院している子どもの家族のストレス認知に関する研究 - 家族ストレス尺度の検討 - 日本小児看護学会 第 11 回学術集会 講演集 2001 : 158-9.